平成30年度　第２回逗子市自殺対策計画策定等検討会　概要

日　時　　平成31年１月31日（木）　午後３時から５時
場　所　　逗子市役所５階　第２会議室
出席者
【アドバイザー】成瀬雅水、小保内洋子
【メンバー】池上直樹、竹田幸子、草柳ゆきゑ、新倉昭治、中野祐子、野中邦一、
　　石澤方理、（代理出席）河野隆史
【事務局】廣末課長、西海副主幹、青山、浅川
【傍聴者】０名
欠席者
　武田信一

議事概要
１　開会
　　開会の挨拶
　　前回欠席した池上直樹氏の自己紹介
　　武田信一氏が欠席し河野隆史氏が代理で出席することを説明

２　議題
（１）地域自殺対策計画の策定について
（事務局説明）
　「逗子市自殺対策計画（案）」について説明
　①全体の構成について
　・第１章から第６章まである。
　・第１章は計画策定の背景や逗子市としての位置づけ等をまとめた。
　・第２章は逗子市の自殺の実際を把握するために、国から提示された市町村のデータ
　を中心にまとめた。
　・第３章は逗子市の今までの取組をまとめた。
　・第４章は今後の取組の方向性についてまとめた。
　・第５章は具体的な４本柱を立て、各部署が行っている取組を整理して記載した。
　・第６章はこれからの成果指標について記載した。
　最後に計画を策定する上での資料を添付した。
　②各章についてメンバーの意見
　第１章についての意見

・良くまとまっていると思う。対策としてｐ８にある３つのレベル（対人支援・地域
連携・社会制度）で位置付けられていることが良く理解できる。

第２章についての意見

・高齢者の自殺割合で同居人のない人が少ないことに驚いた。困っているのは一人暮
らしだと思っていた。

→（事務局）統計をみると全国的に同じ傾向にある。はっきりとは言えないが、一人暮らしだと支援の目が入るチャンスがある。家族がいてもその中で孤独な気持ちになっていることがあるかもしれない。

・高齢者は、「同居人に迷惑がかかる」と感じるのかなと思った。

→（事務局）確かに自殺の原因として、家族に迷惑をかけたくないという理由も多い。
また、家族の介護をして疲れたなど逆の部分もあるかもしれない。様々な要因が考えられる。

・ｐ７にあるように、自殺に至るにはいろいろな要因が絡んでいて、急に家族に問題
が起きた時に乗り越えたり、手立てを探すために、自分がいろんな知識を吸収しておかないといけないと感じた。高齢者であっても、学生であっても情報の枝葉があると良い。当事者が自分でキャッチできるような情報を提供できるような環境が大事。当事者が発信してくれて、周りが気付けば繋げられるが、一人で抱えてしまうと手立てが難しい。

・ｐ13 のところで逗子市の自殺死亡率は 14.6 で神奈川県は 16.4 であるが統計上優位な差なのか。

→（事務局）自殺死亡率は、人口 10 万人単位で換算したものである。それをもって逗子市が少ないかと言うと一概には言えない。全国的に神奈川県と逗子市は減少傾向にある。自殺死亡率の見方は難しい。他と比べてどうかというよりも参考にみる程度。死亡率をどう減らしていくかの目安としてみると思っている。

・統計的に見て、逗子市の死亡率が低いのであれば、ポジティブな要素は何か。なぜ
低い水準で保たれているのか疑問に思う。

→（事務局）自殺者が減っているポジティブな要素についてはっきりしたことは言い
にくい。ｐ５にある生きることの促進要因を増やし、生きることの阻害要因を減らしていくことに力を注げば、自殺者が減っていくだろうと言

われている。そこを進めて行くのが良いと思っている。

・報告では逗子市の自殺者数は平成 28 年が出ているが、29 年も出ているのか。この
数字は年なのか年度で見ているものなのか。平成 30 年はいつ出るのか。

→（事務局）出ている。平成 29 年 1 月から 12 月までの逗子市の自殺者数は５名である。１月～１２月の１年でみたものである。平成 29 年の統計報告があったばかりなのでおそらく 30 年は来年の今頃に出ると思われる。

・統計の取り方を教えて欲しい。

→（事務局）警察統計で、発見地・発見日でとっている。自殺率は、厚生労働省の
平成 27 年度国勢調査の確定数を基準人口として出したものである。警察統計は、逗子市以外の人も含まれていて、人口動態統計は居住地でみている。今回、自殺対策のプロファイルは警察統計を見ているのでそちらに合わせている。

・平成 29 年の自殺者数は国からデータが来るまで、逗子市で把握できないのか。逗子警察で自殺を把握した時、どこを巡って逗子市に情報が来るのかわからない。

→（事務局）死亡届の理由が自殺として出るわけではないので、市で直接把握できな
い。警察統計は調査をして決定するので、リアルタイムでわかるものではない。警察統計も平成 29 年であれば今のタイミングでしかわからない。

・関わったケースで死亡時にどこの誰だかわからないケースがある。本人の特定に時間がかかる。

第３章についての意見

・イベント的なものではなく、日常的に開かれている窓口はあるか？

→（事務局）例えば「虐待の窓口はここ」というようなものはあるが、市のレベルの
自殺に対してのホットラインはない。県や国レベルではあるので、その
PR は機会をみて行っている。担当課の国保健康課が地域に出向いて、心
の健康の話しやゲートキーパー養成講座を開いている。

・ゲートキーパー研修は 1 回で終わりの研修なのか。再研修はあるのか。また、ゲー
トキーパーの活動報告の場はあるのか。

→（事務局）保健所と一緒に基本的なゲートキーパー研修を受けた人のフォローアップ研修をはじめたところである。お渡ししたチラシはフォローアップ

研修の一環として企画したもの。自殺の実際や誰でも起こりうる危機であるという基本的なことを周知することに力を入れた。系統立てたフォローアップ研修の計画は今後の課題である。ゲートキーパー研修は、住民サービス、対人支援をしている団体に今まで声をかけて実施してきた。今後は市民向けに実施していきたいと思っているが、自殺対策という言葉が重いので、心の健康づくりとして少しずつ市民団体に行っているところである。

第４章についての意見

・ 60 歳以上の自殺者の 75%が同居者あり（ｐ16）という数字であるが、介護保険と関りのある年齢であると考えると、ケアマネージャーがゲートキーパーを担ってくれるのではと考える。市からの要請はどうなっているのか。

→（事務局）ケアマネージャーの総会で２回ゲートキーパー研修を行った。

・家族の様子をケアマネージャーが握っていると思う。そこから糸口が見いだせないか、深くは入れればいいのに。家族の中の孤独は強いと考える。

→（事務局）未病センターを設置し２年になるが、そこで家族との関係等で辛い気持ちを吐き出す人がいる。支援のしにくさに波及してくると、地域包括支援センターが関わったり、事例検討をしたり、みんなで関わっていくかもしれない。そういう関りを持つ人に知識を持ってもらうことはこれからの対策には有効と考える。

・今回の会議があるということで、生活困窮者の支援の内容を改めて振り返った。この事業は逗子市から逗子市社会福祉協議会が委託を受けて行っていて４年目になる。年間新規の相談は 70 人から 80 人程度。4 年間の相談を受けた 300 人の内希死念慮のある人は 15 人（５％）であった。支援している 15 名は現在も自殺はされていない。いままでの支援は自殺対策として意識してやってきたわけではないが、死にたいと訴える人に対して励ましや寄り添いをし、死にたくなった原因がはっきりして、取り除くことで死にたい気持ちが無くなっていた。原因に対する対策が大事であると感じている。

第５章についての意見

・日常的に相談に来る人は多いのか？こんなに窓口があるとは驚いた。

→（事務局）市の広報には毎月掲載している。相談件数については国保健康課で把握しているわけではない。それぞれの相談窓口から必要な窓口に繋がり対応できたら良いと考えている。

第６章についての意見

（質問無し）

③サブタイトルについて

・いままでの共同した取り組みの経験から鎌倉市・逗子・葉山で自殺対策の計画のサブ

タイトルを「いきるを支える」で統一しないかと鎌倉市から提案を受けた。逗子として

はそのようにしたいと考えているが、ご賛同いただけるか。

→（メンバー賛同）

・みなさんに出してもらったサブタイトルのテーマは普及啓発などでつかわせていただきたいと思う。

④　全体を通した意見

・自殺した人だけを調べるのではなく、死のうとしている人もキャッチできると良いと思う。

・上席の職員にも参加してもらうと自殺対策の推進がより進むのではないか。

⑤　アドバイザーからの感想

・関与していた人が自殺してがっかりした経験があった。こんなにやれることがあると改めて確認できた。

・こんなに相談窓口があるのだと思った。ひと事ではなく、愛を持って過ごしていきたいと思った。

５　閉会